

「活動現地を視察して」 木村 敏雄 (PHJ 代表)

タイ、インドネシア、カンボジアをそれぞれ3日間、駆け足での視察でした。

タイでは、現在行っている支援プログラムに関連して多くの要望がでていますが、以下にそのうちの3つを挙げると(1)小児先天性心臓疾患を持つチェンマイ北部の子供たちの手術を2001年以來240名余支援してきたが大学病院の医療設備の老朽化による補修の要望 (2)慢性病の子供のリハビリ教育を行っているサンサイ病院から施設改善の要望 (3)チェンマイ保健省から北部地域でのモバイル検診の導入サポート、など様々である。これらの優先度・波及性などを調べたいの支援を決めていきたい。

インドネシア、カンボジアの私たちの活動地域ではどちらも水道・電気等の社会インフラがほとんど整備されておらず、その中で地域保健医療強化、栄養教育などを行っている。右表は各国の保健事情を示しているが、カンボジアの1,000人出生時の乳児死亡率は70人だが厚労省・厚生白書によると日本も1950年では60人。ほぼ日本の60年前と同程度とい

うことになる。当時の日本は電気も小さなラジオを聞ける程度、上下水も未整備。その後日本は高度成長(次頁に続く)



インドネシアの活動地(セラン県)では、川の水は飲料、洗濯、行水、トイレなどすべて共用で、その水が原因とされる下痢、皮膚病のほかチフス、先天性異常の赤ちゃんが多く生まれている

統計資料から見る保健事情

	日本	タイ	インドネシア	カンボジア
乳児死亡率 (人/1,000出生)	3	6	25	70
5歳児未満児死亡率 (人/1,000出生)	4	7	31	91
妊産婦死亡率 (人/100,000出産)	8	12	310	470
平均余命 (年・人出生時)	83	70	70	59

出典：UNICEF、世界子供白書 2009

巻頭言 副理事長就任にあたって



PHJ副理事長
小田 晋吾

日本ヒューレット・パカード元社長

このたび副理事長の重責を拝命いたしました小田でございます。

甲谷理事長よりお声をかけていただいた時は、正直のところ私自身の37年にわたる社会人としての経験では、内容的にも著名なNPO活動をそのチームメンバーの一人としてリードできるか大変不安でもありました、自信もありませんでした。一方で“1企業の成長”一筋で生きて来た者にとって今後の人生の中で今まで培ってきた様々な経験を生かし、社会に対しいくばくかの貢献をしたいという想いもあり、この重責をお受けした次第であります。

メンバーとなってまだ日も浅い私ではありますが、月例会議等への参加を通じPHJとその活動について私なりのイメージが出来てまいりましたので、僭越ではありますが皆様とシェアしてみたいと思います。

PHJは発足以来13年に及ぶ活動を通じて基本方針、財

務基盤、そして運用管理体制等の運営基盤がすでに確立しており、活動の主体は理事長の掲げる「日本の顔の見える支援」をさらに強力で推進してゆくことだと考えております。

そのような観点から考えられるチャレンジの一つは現場力を強化し支援先での満足度を一層向上させることであり、「支援先での体制強化」、「支援プログラムの充実」、「支援先と本部間の連帯強化による見える化」などが今後注力すべきポイントだと思います。

私の思うもう一つのチャレンジは、政治・経済・環境・科学技術等々が世界規模で変化する社会にあつて、PHJの運営基本方針である「人間の尊重」、「良質な活動」、「中立性」、「基金の効率活用」をチームの皆さんとしっかり守ってゆくことで何か起こった時には、常にこのPHJの原点に立ち返ることが出来るようにしたいということです。

最後になりますが、PHJに関連するすべての方達が「活動して良かった」、「支援して良かった」と思える一体感・信頼感のようなものが活動を通じ生まれることを願っています。

以上、新参者が偉そうなことを述べてまいりましたが、私自身フレッシュな気持ちで活動に取り組んでまいりますので、皆様には宜しくご支援のほどお願い申し上げます。

長とともに様々なインフラも整備され、欧米先進国を凌ぎ世界トップレベルになった。

インドネシア、カンボジアの活動地域では現在も自宅分娩が多く、医療専門知識、衛生知識の少ない産婆さんによる分娩が一般的で、社会保障制度もない。私たちは各国の保健省と協力して助産師教育、医療機器の整備とともに保健センターでの分娩を行うよう推進している。

前述の乳児の死亡率でインドネシア、カンボジアは日本に比べ5～60年遅れていると言われるが、ではこうした支援を通して、これから何年でキャッチアップできるのだろうか。これは、私たちの支援活動はもちろんであるが、それぞれの国の産業、資源、国のコミットメントなどの要素や今後の医療・衛生・環境などの技術革新でどこまで短縮できるか決まってくるのではないかな。

PHJの海外スタッフはインドネシア、カンボジアに駐在している若い日本人所長2人を含め、3ヶ国で合計20名で支援活動を行っている。その活動の強力なパートナーとして活動地域の自治区、保健セン



カンボジアの活動地域（コンポントム州）の現地の食材による母親への栄養教育と栄養失調の5歳以下の子供たちへの栄養給食の様子。

ター、村などで選任されたボランティア、助産師、看護師、医師など総計約1,300人ものボランティアの人たちと一緒に活動しており、自立に向け教育を中心に支援活動に取り組んでいる。

最後に、カンボジアのある保健センターに治療に来た中年女性の裸足の片足が、甲から指先まで紫色に大きく腫れ上がっていたが、治療薬をもらい帰るときの表情がなんとも嬉しそうだったのが印象的であった。満足度はそのレベルの絶対値ではなく、変化の度合いで生まれ、希望も持てると思う。私たちの支援活動も常に変化を生み出すよう今後もみんなで努力していきたい。

「タイ、ピア教育者養成研修に参加して」 (寄稿) 武長 純子(大学4年)

私とPHJとの出会いは、昨年の夏、タイ事務所でのインターンシップ時です。そのご縁もあり、今年の8月28～30日にかけて、タイ北部チェンマイで実施されたPHJタイ、ピア教育者養成研修に参加させて頂きました。チェンマイの主要3大学から集まった、計19名の学生達。彼らは、将来のピア教育者となるべく、HIV/AIDSの基礎知識やカウンセリング法、コンドーム使用法など、10に渡る項目について、参加型ワークショップを通じて学習しました。

まず、私が何より驚かされたのが、参加した学生の熱意です。国民の1～2%がHIV感染者であると言われていたタイ。身近な問題としてHIV/AIDSを捉え、当事者意識をもって今研修に参加しているからかもしれません。また、大らかなタイ人気質も特記すべき点でしょう。彼らは、HIV/AIDSを語る上

で欠かせない「性」の話題に関して、非常にオープンに話をします。3日間という短い期間ではありましたが、タイがHIV/AIDS予防啓発活動で有名となった理由を、垣間見ることができた気がします。今研修を終えた彼らは、今後、母校の大学や近隣の中学・高校で、HIV/AIDSの知識を伝えるピア教育者として、立派な活動をしてくれることでしょう。

さて、ここで日本に目を向けてみるとどうでしょう。先進国で唯一HIV新規感染者数が増加している日本。しかしHIV/AIDS教育分野では、「寝た子を起こすな」という思想がまだ根強く残っています。今後の日本も、タイのHIV/AIDS教育から学ぶことがあるのかもしれませんが。最後になりましたが、今回の滞在を支援して下さいましたPHJ職員の皆様へ、この場を借りて厚く御礼申し上げます。



研修参加者一同



参加型ワークショップにて

カンボジア・チュックサット保健センターの分娩室建設が始まりました

カンボジア事務所が現在のバライ・サントック保健行政区での活動をはじめから、2年が経ちました。これまでに、保健センターで、各村に2名ずつ任命されている保健ボランティア、そして村で長年お産を担ってきた伝統的産婆のための毎月の会議や保健について勉強するワークショップを行ってきました。村の保健状況を良くするという目的のもと、彼らは村での保健教育に協力し、保健センターのサービス利用を村人に推進してきました。保健センターと村との協力関係も強化され、そのおかげで、現在、保健センターのサービスの利用者が増加中です。

利用が増えるのはうれしいことですが、一方



で問題もあります。現在の施設では狭すぎて十分なサービスが提供できないのです。特に、一度に3人が分

娩に訪れた時には、廊下でお産をした人もいました。このように、いいサービスを提供するために十分なベッド数やスペースを確保することは急務です。カンボジア事務所では、そのような問題に対応するために、チュックサット保健センターに分娩室を建設することにしました。今回の建設にあたっては、日本政府から日本 NGO 連携無償資金協力をいただいております。

雨期が明け始めた11月初旬に分娩室の建設を着工しました。分娩室にはベッドが3床備えられ、トイレや水周りが設置され、ソーラー電池による電気の供給もされることになっています。保健センター・スタッフはもとより、保健ボランティアや伝統的産婆もこの支援を非常に喜んでおり、安全な分娩介助推進の一助になることを期待しています。建設業者も、「村を支える分娩室」の建設を請け負い、はりきって建設を進めています。

私たちは、村人が安心して分娩介助サービスを受けられる設備を整え、また村での保健教育を実施して、母子保健のさらなる改善に取り組んでいきたいと思っています。(中田)

タイ PH-Japan Thailand 新しいオフィスで活動開始

2008年10月にPHJのタイ事務所として活動をはじめたPH-Japan Thailandは現在6件の保健プロジェクトを10万人の貧しく恵まれていない人々のために実行しています。昨年末移設した新しい事務所では9人のスタッフが働いています。

私たちの2010年度活動方針は、現在行っているプログラムを維持強化するとともに、タイのみならずベトナムでもプレゼンスを強め活動の機会を広げることです。

事務所のスタッフのほかに保健に関する公的機関の職員や村のボランティア、学生たち849名のボランティアが私たちの活動を支援してくれています。PHJ-TはこれらボランティアやPHJ本部、日本のドナーの皆様からの長年の



新しいタイ事務所



タイ事務所のスタッフ



ボランティアへの教育



公的病院の職員と共に

協力と支援に心から感謝しています。2010年が皆様にとって幸せな年となりますように祈っております。

<http://www.phj-thailand.org/> (タイ所長 ジラナン)

会員のひろば

PHJで活躍されているお2人のボランティアさんからの「PHJでの活動に参加して」



日置哲二郎 (大学院2年)

現在、大学院では国際医療協力について学んでいますが、この分野において実際に活動しているNPOを見てみたいと思い、ボランティアとしてPHJの活動に参加しました。

大学院における学問的なものとは異なり、PHJでは、実践的な活動を体験する機会をいただきました。また、国際協力では現地における活動が注目されますが、PHJの活動に参加し、現地での活動と同様に、それを支える日本での活動やスタッフの重要性を改めて実感しました。今後もボランティアとしてPHJの活動への僅かながらの貢献と、ここでの経験を自分の将来につなげていければと思います。



海野 桂 (社会福祉施設職員)

時折の事務所でのお手伝いなど限られた時間を通してではありますが、国際協力について知る機会をいただき、支援活動とは人と人との多様なつながりで成されていることな

のだと感じております。現地の人々を保健・医療につなげ、現場でのPHJの活動と東京事務所がつながり、国内でも支援をなさる方々との関係が多岐に展開されているようです。スタディツアーへの参加も、そのつながりの一端に直に触れさせていただき貴重な経験でした。出会った方々の顔を思い浮かべつつ、今後も微力ながら活動に参加できましたらうれしく思います。

PHJ新スタッフ紹介



矢崎 祐子

4月から広報グループに加わりました。PHJとの接点は12年前にさかのぼります。其の時に考えていた規模をこえた広範囲かつ現地で本当に歓迎されている支援、教育、啓蒙活動をPHJは地道に着実に展開しています。会員の皆様、現地のスタッフ、多くの支援者のご理解、努力、協力があるからです。これらの活動をお伝えし、また提案や要望をお聞きすることでPHJ活動をさらに発展することができればと願っております。



山崎 承一

過ぎこし半生を振り返る時、生まれてこのかた親、家族はもとより世の中の多くの方々のお世話になって今の自分があることをつくづく感じます。

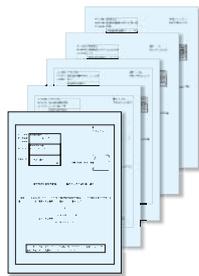
お世話になってきた世の中へ何らかの形でお役に立つことにより、これまでの感謝の気持ちを形に表したいと思っていたところ、かつてお付き合いのあったPHJから声をかけていただき、またとない機会と考えお世話になることにしました。

“企業、個人の社会貢献に対する関心”と、“途上国の母子の健康への希望”を結ぶPHJの活動に携われるのも、また感謝です。

5回目の認定資格取得

PHJは、平成13年12月6日付けで国税庁から認定特定非営利活動法人資格の第1号を取得しました。以降2年毎に認定資格申請を行い、切れ目なく資格を維持してきました。今年度申請から資格有効期間が5年に延び、申請資料ボリュームも増えましたが、平成21年12月7日付けで、平成22年1月1日から平成26年12月31日まで5年間の認定資格を取得しました。

ご承知とは思いますが、PHJへのご寄付は、個人・法人を問わず税制上の優遇措置が受けられます。個人の場合、確定申告を行うことで税の控除を受けることができます。所得税の控除に加え、東京都・神奈川県をはじめとした一部地方自治体では、個人住民税の控除も受けられるようになりました。お住まいの自治体がこのような控除を実施しているかどうかや詳しい手続きについては、各自治体にご確認ください。(小林)



5回目の認定通知書

キャンノン、チャリティ・ブック・フェア会場設営に参加

PHJ法人会員であるキャンノンの2009チャリティ・ブック・フェア会場設営に参加させていただきました。これはグループ会社を含めた社員のチャリティ活動として、図書やCD等の収集を呼びかけ社内バザーを開き、その収益金に会社から同額の寄付(マッチング・ギフト)を加えてアジア地域を支援しているNPO団体に寄付をされる活動です。PHJも寄付をいただく団体の一つですが、今年は会場設営に参加して、カンボジア母子保健支援の活動報告を行いました。(横尾)



PHJも参加した社員ボランティアによる会場設営